

勝光明院

〔古記に曰、鳥羽にありと、今旧地詳ならず。元亨釈書曰、保延二年三月二十三日鳥羽の勝光明院を慶

す、導師は忠尋、咒願は覚猷、其日帝、上皇、六宮百司みな集會に預ると。云々〕

古今著聞集曰 久寿元年二月十五日、法皇美福門院御同車にて鳥羽の車殿より勝光明院へ御幸ありて、庭の桜を御覽

ぜられけり。先阿弥陀講を修せらる〕

竹田 〔鳥羽のひがしにあり、洛陽東洞院油小路等の南に当りて伏見往来の順路なり。いにしへは真幡寸の庄と号す。

今安楽寿院北門少し西の街を真幡寸の辻といふ。又同院良の外を亀若の辻といふ、いにしへ竹田山王宮の社司亀若氏の

宅地なりとぞ〕

続千載 契りをか我万代の友なれや竹田の原の鶴のけ衣 法皇御製

玉葉 打渡す竹田の原に啼たづのまなく時なし我こふらくは 坂上郎女

堀川百首 心から竹田の里にふしなれて幾夜水鶏にはかられぬらん 俊頼

近衛院陵

〔北向不動院の前路の西側にあり、前編に見へたる美福門院と同陵なり。編年集に曰、久寿二年七月廿

三日、近衛の皇居に崩し給ふ、御年十七、八月一日船岡山の野に葬り奉り、御骨を知足院に安置すと。云々〕

○〔百練抄曰、長寛元年十一月廿八日、近衛院の御骨を鳥羽の東殿美福門院の御塔に渡し奉ると。云々〕

○〔享保三年大樹吉宗公御治世の初め、歴代帝陵の御改あり。其記に曰、山城園紀伊郡竹田村仁和寺御領の門畑中にあり、美福門院の旧地と。云々〕

西行寺

〔不動院の北にあり。鳥羽院北面佐藤兵衛憲清此所に別館を賜つて、鳥羽の仙院へ昵近す。保元元年七月二日鳥羽院崩御の後、こゝにて落髮し給ひ西行法師と号す。剃髮塔あり。以上寺説なり。本尊は阿弥陀仏の坐像を安置す。又西行上人同侶西住上人の両像共に厨子に安ず、又西行上人の念持仏地藏尊を安ず、定朝の作にして立像一尺八寸、火災除滅の応驗ありとて火消地藏と称す。今浄土宗の僧守る〕

扶桑略記曰 公家近來九条の南鳥羽の山庄新に後院を建、凡方百余町を下す、近習の卿相待臣地下雑人等、各家地を

賜つて舎屋を营造す、宛都遷のごとし。池の広さ南北八町東西六町、水の深さ八尺、風流の美勝計べからず

山王大宮

〔安樂寿院のひがし民居の北藪の中にあり〕十禪師社〔大宮の東廿間ばかりにあり。両社共に保延年中鳥

羽上皇城南離宮にまします時勸請ありしなり。いにしへは社頭巍々として神領あり、例祭は神輿をわたし、催馬楽走馬等あり。此里長谷川氏に其時の図式ありて家藏す。今四月初申日をして土人祭祀をなす〕御幸社〔大宮のやしらの乾甘間ばかりの田間にあり。いにしへは是より西の方にわたり三町ばかりの杜にして、則山王の御旅所なり〕猿塚〔竹田ひ

がしの端伏見境にあり、土人庚申塚と呼ぶ。いにしへ此地に白猿来り遊ぶ故に、山王権現影向の地といふ。又国分寺の前田間にも猿塚といふあり、何れか決せず」

国分寺こくぶんじ

〔竹田里高瀬川の西にあり。本尊阿弥陀仏は、春日の作にして立像三尺ばかりなり。聖武帝六十余州国毎に一寺を建立ありて国分寺となづけ給ふ。又南山城相楽郡みなみやましるさからに国分寺の旧跡あり、後世此所へ移したる歟。又其頃光明皇后の御願にして、国毎に国分尼寺こくぶんじを建て女僧を住しむ、其旧跡なる歟、いづれか分明ならず。今廻国の者此所へ来つて寄宿す〕

九品寺くほんじ

〔同村国分寺の南にあり。○伽藍開基記曰、当寺本朝第七十四主鳥羽法皇洛の南竹田の中に就て離宮を構、其傍に九箇の寺を建、阿弥陀仏の像を安置して安養九品を表す、号て九品寺といふ。年代久遠なるをもつて廃壊し、唯此寺こゝに存すと。云々〕